日本建築学会九州支部研究報告
第 48 号　2009 年 3 月

旧大日本製糖大東製糖所と北大東出張所の社宅街について

-製糖業に関わる建築活動からみた戦前期日本の影響下にあった地域の相互比較に関する研究　その１-

正会員○辻原万規彦[*1]　同　今村仁美[*2]　同　安浪夕佳[*3]

９．建築歴史・意匠-２．日本近代建築史　　建築歴史・意匠
大日本製糖，東洋製糖，製糖業，燐鉱，工場

１．はじめに

本研究は，旧植民地諸地域を含む日本における製糖工場とそれを取り巻く社宅街の建設の過程を明らかにし，これらの比較を行うことを通して，いわゆる「内国植民地」を含む旧植民地諸地域といわゆる「内地」における当時の建築活動のそれぞれの地域での特質性や相互の同質性を明らかにしようとすることを目的としている。

「内国植民地」と呼ばれることもあった沖縄や北海道も含め，戦前期の全ての旧植民諸地域で営まれていた大規模な産業として製糖業が挙げられる。経営史学の分野で様々な研究[1)] がなされている戦前期の製糖業は「日本を代表する主力産業の一つであり，日本企業のアジア進出のプロトタイプともいえる海外展開を行った産業」[2)] と指摘される。そこで，「製糖業に係わる建築活動」という指標または評価軸を用いることで，従来はそれぞれの地域別に研究を行うことが多かった旧植民地諸地域での建築活動について，全体を見渡した相互の比較が可能になると考えられる。

また，各種産業を支える社宅街については，近年，かつての西山夘三の研究に引き続き，主として鉱業系の様々な社宅街を対象に研究が進んでいるが，個別の社宅街を扱った研究[3)] が多く，地域を越えた比較はほとんどなされていないのが現状である。

このような背景のもとで，本稿では，南北大東島における旧大日本製糖の工場と社宅街の様相を明らかにすることを目的とする。なお，南北大東島における戦前期の製糖業，燐鉱業ならびに社宅街に関連する調査としては，具志川市史編さん室よる聞き取り調査[4)] や沖縄県教育委員会による総合調査[5)]，国立民族学博物館の共同研究によるシンポジウム[6)] などがある。

なお，本稿では，当時の用語や呼称をそのまま用い，引用文などは，原則として現代仮名遣いに改めた。

２．南北大東島と製糖会社[7)]

南大東島では，M36(1903)に八丈島出身の玉置氏によって本格的な開拓が始まり，後に製糖工場が建設されたが，規模も小さく継続的な操業には至らなかった。その後，南北大東島ともに，T5(1916)に東洋製糖株式会社に売却され，南大東島に本格的な製糖工場が建設された。S2(1927)に東洋製糖は大日本製糖株式会社[8)] と合併し，大日本製糖の大東製糖所として第二次世界大戦中まで操業を継続した。戦後，戦前の工場跡を利用して大東糖業が操業を開始し，現在に至っている。

一方，北大東島では，玉置氏により M41(1908)に燐鉱の採掘が開始されたもののすぐに事業が停止された。その後，東洋製糖により T8(1919)に鉱業所が落成して採掘を再開し，同じく大日本製糖の北大東出張所として戦時中まで操業を継続した。戦後には，一時米国による採掘が行われたが，現在は行われていない。

３．糖業協会所蔵史料にみる建築活動

糖業協会が所蔵する各種史料から，南北大東島での建築活動を概観する。特に，他ではほとんど史料が見出せない東洋製糖については，第９回（T3(1914).7.1～T4.6.30）から第 12 回（T6.7.1～T7(1918).6.30）の間と第 18 期（T12(1923).7.1～T12.12.31）から第 25 期（T15.10.1～S2(1927).3.31）の営業報告書（以下，「洋糖報告」と略す。）が所蔵されている。なお，東洋製糖は，S2.7.29 に大日本製糖との合併契約が成立したが，その後の大日本製糖の報告書には，建築活動に関する記述はほとんど見られない。

第 11 回(T5(1916).7.1～T6.6.30)と第 12 回(T6.7.1～T7.6.30）の「洋糖報告」によれば，「新式分蜜糖工場建設ノ計画ヲ以テ米国布哇ヨリ六百噸（筆者注，その他のほとんどの資料では能力は 500t とされている。）能力ノ機械ヲ購入シ」，「機械据付其他ノ諸工事大正七年二月十五日全部完成シ直ニ製糖ヲ開始」した。

Company towns of the Old Dai-Nippon Sugar Company in Minamidaito and Kitadaito
- Study on the old Japanese buildings and company towns constructed by sugar company in the Japanese administration area Part 1 -
TSUJIHARA Makihiko, IMAMURA Satomi and YASUNAMI Yuka

また，大日本製糖の社内資料と考えられる『大東島製糖所概要』(S6(1931).3 調）によれば,「工場敷地一万余坪，建物総坪数一,四七三坪木造亜鉛板葺ナリ/工場本館，事務室，修繕場，鋳物工場，農具修理場，物品倉庫，製品倉庫一切完備ス」とされている[9)]。

工場を取り巻く社宅街についても,同じく第 12 回の「洋糖報告」に「本期中工場倉庫宿舎ヲ新築シタルモノ（略)，大東島製糖所百一棟，(後略)」とあることから，同じ時期に建設されたと考えられるが，社宅の棟数は現在のところ不明である。また，文献10）では，T12(1923)に火災があり,社宅が再建された旨の記述があるので，後述する現在まで残っている社宅は大正末期以降の建設と考えられる。

なお,「洋糖報告」に見られるその他の建築活動に関する記述は次の通りである。「大東島製糖所ニ於テ病院倉庫宿舎等五棟ヲ新築セリ」(第 19 期 (T13(1924).1.1～T13.6.30))。「大東島製糖所ニ於テ社員宿舎，浴場，倉庫，汽罐室等九棟ヲ新築セリ」(第 22 期（T14.4.1～T14.9.30)。汽罐室は北大東島の可能性もある。)。「大東島製糖所ニ於テハ社員宿舎，倉庫機関庫等大小拾八棟ヲ建設セリ」(第 24 期（T15.4.1～T15.9.30))。

４．南大東島における旧大日本製糖の社宅街

図１に，旧大日本製糖大東製糖所の社宅街の復原図を示す。第二次世界大戦中と戦後の航空写真，各種復原図ならびに現地調査の結果などから作成したため，昭和 10 年代後半の状況を示す復原図である。

玉置氏の時代とは異なる位置，島中央部の盆地の南西部に工場が建設されたのは，大量の冷却水を確保しやすいよう島中央部の沼に近く，なおかつ沼に接近して高台がある場所を選んだ結果と考えられる。また，製糖期（冬から春にかけて）の卓越風である北風を避けて工場の西側に社宅街を展開させたと考えられる。そのため，特に，工場より一段高い場所に建設された社員の社宅群は工場に隣接してはいない。一方，現業員クラスの社宅街は，工場と同じ高さの土地，もしくは社員の社宅よりも低いレベルの土地に展開している。

また，筆者らがこれまでに調査を行った戦前期の南洋群島の製糖会社である南洋興発の社宅街では，街路が碁盤目上に配置され，整然とした都市計画がなされたことが多かった[11)] のに対し，南大東島では地形に沿わせつつ,何度かに分けて拡張したことが推測される。

社宅そのものを見ても，同じ四戸建社宅でも建坪や間取りが様々であり，ほぼ同じタイプの社宅が建設された南洋群島の場合とは大きな差がある。社宅も含め，様々な建物は，木造あるいは現地産の石造であり，古いものは檳榔の葉葺き，新しいものはトタン葺きであった[12)]。なお，四戸建社宅の場合は実際には二戸＋二戸の形式であり，間に「中道」がある。風通しのためと考えられるが，このタイプは同じく南方の熱帯性気候をもつ南洋興発ではみられない。また，台湾の製糖会社の社宅街に関する文献13)，14) でも全てが網羅されている訳ではないものの，このようなタイプはみられないが,筆者らは未調査であり,今後の課題である。

他の社宅街と同様に様々な関連施設も建設された[15)]。特に，離島であるため娯楽に乏しく，社員用と現業員用の倶楽部，テニスコート，柔道場，剣道場などが設けられ,会社購入の映写機で活動写真大会も催された。また，住民の生活を支える会社直営の売店，病院，小学校なども建設され，後には郵便局も設置された。

大正末年頃の病院は，医局 67.5 坪，病院 112.0 坪，隔離病舎 12.5 坪,炊事場 30.5 坪であった。医師２名，調剤手２名，看護婦３名，産婆１名の体制で，ほぼ無料で診察治療を行い,「本島に於ける衛生状態は概して佳良なりといふも敢て不可でない。」[16)]状態であった。

工場と社宅街の北側の玉置氏の時代からの集落には,小学校や警察官駐在所が設けられていた。このうち，小学校は玉置氏の時代から開設されており，東洋製糖に移った後の T6(1917)には，私立南大東尋常高等小学校と改称され，教育費は全額会社が負担していた。

工場関連施設では,幾つかの倉庫(石造,RC 造とも)，石造の機関庫などが残っており，詳細は確認できてはいないが，工場本体の敷地内にも幾つかの遺構が残存している。一方，社宅街では，幾つかの四戸建社宅（社員用，現業員用とも）が残っているほか，天水タンクなども残っている。中には，大正 14（1925）年頃とされる写真[17)] に写り込んでいる社宅と考えられる社宅もあるが，現在空き家となって荒廃しつつある社宅もあり，今後，緊急かつ詳細な調査と記録が必要である。

５．北大東島における旧大日本製糖の社宅街

戦前の北大東島では，普通燐鉱と燐酸ばん土鉱の採掘が行われていた。露天掘りで採掘した燐鉱石は回転式乾燥機もしくは日光で乾燥させて貯鉱した後，積取

図１　旧大日本製糖大東製糖所社宅街復原図（写真は現況）

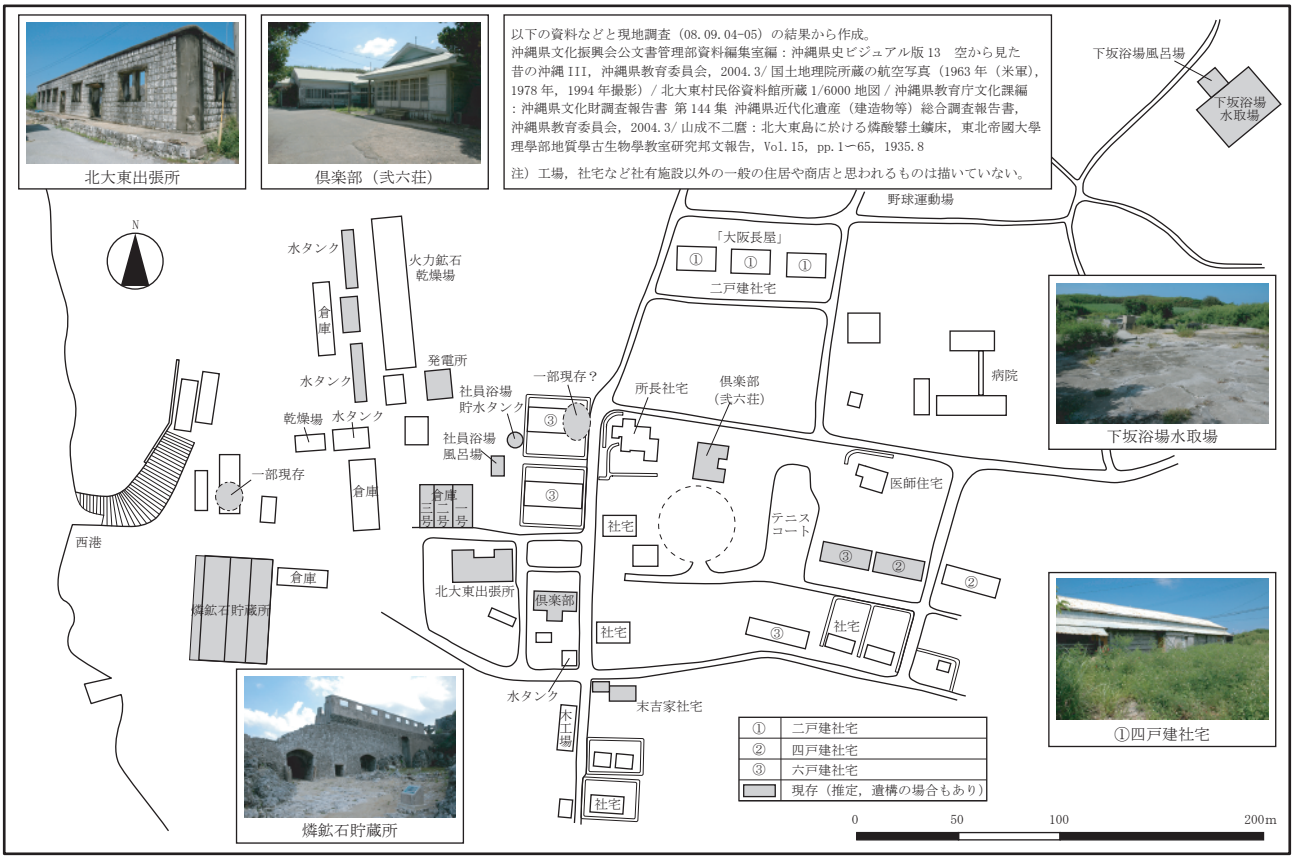

図２　旧大日本製糖北大東出張所社宅街復原図（写真は現況）

船で内地に運搬し，加工して主に肥料として用いられた[18]。なお，T14(1925)頃の燐鉱工場関連施設の棟数や建坪は，文献19）などに詳しい。

図２に，旧大日本製糖北大東出張所の社宅街の復原図を示す。戦中と戦後の航空写真，戦前の地図，各種復原図ならびに現地調査の結果などから作成したため，昭和10年代後半の状況を示す復原図である。

工場の立地については，採掘地区からも近い港付近であり，輸送や積み込みの利便性のことを考えれば，最も妥当な位置であろう。社宅街は，工場の東側（山側）に隣接して展開されているが，南大東に比べればかなり規模が小さい。また，採鉱にあたる鉱夫の宿舎は，この社宅街とは別にあり，社宅街の南側の大正村や北西側にある下坂村などに設けられていた。

南大東と同様に，関連施設が設けられた[20]。倶楽部，テニスコート，野球運動場，売店，病院，小学校などである。ただし，小学校は社宅街からは離れた島の中央部に立地し，T7(1918)に南大東の分校として開設され，T10(1921)には私立北大東尋常小学校となった。

工場関連施設では，登録有形文化財に指定された燐鉱石貯蔵庫と燐鉱石積荷桟橋の遺構のほか，幾つかの倉庫，発電所とされる遺構ならびに水タンクなどが残っているが，当時の工場の全貌は復原できていない。なお，汽罐室と考えられる遺構には，三石耐火煉瓦加藤合資会社製と推測される耐火煉瓦[21]が残っている。さらに，北大東出張所（売店を併設）の遺構，上級社員用倶楽部とされる弐六荘（共に登録有形文化財，後者は現在民宿として使用。），一般社員用とされる倶楽部の遺構などの関連施設も残っている。

社宅については，四戸建社宅２棟が現存しており，そのうち１棟は現在も使用中である。また，社員浴場風呂場と貯水タンク，鉱夫用であった下坂浴場風呂場と水取場（全て登録有形文化財）の衛生施設も残っている。その他にも戦前期の社宅と推定されるものも残っているが，詳細を確認できておらず，南大東と同様に，早急かつ詳細な調査と記録は今後の課題である。

６．まとめと今後の課題

本稿では，南北大東島における戦前期の社宅街の復原図を示し，筆者らが研究を進めてきた南洋興発の社宅街との比較を行った。今後は，台湾はじめ，北海道，朝鮮，樺太，満洲についても調査を行い，報告したい。

謝辞　現地調査の際には，次の方々にお世話になった。南大東村教育委員会 社会教育主事 宮城克行氏，南大東島まるごと館 副館長 東和明氏，大東糖業株式会社南大東事業所 取締役副所長 仲田勝美氏，同 次長 新垣好伸氏，北大東村教育委員会 教育長 城間盛男氏，同 浅沼忠夫氏，北大東製糖株式会社 代表取締役 宮城一夫氏，同 北大東事業所 課長代理 宮城好孝氏。また，史料の閲覧にあたっては，社団法人糖業協会にお世話になった。なお，本報の一部は，平成20年度科学研究費補助金（若手研究（B），課題番号20760430）（基盤研究（C），課題番号20560598）によった。記して謝意を表す。

参考文献・引用文献・脚注

1) 例えば，以下の文献など。久保文克：植民地企業経営史論　「準国策会社」の実証的研究，日本経済評論社，1997.2。
2) 経営史学会編：日本経営史の基礎知識，p.149，有斐閣，2004.10
3)）次の文献で，社宅に関する既往研究をレビューした。辻原ほか：旧南洋群島における日本委任統治時代の官舎・社宅に関する研究，住宅研究総合研究財団論文集，No.33，pp.195～206，2007.3。
4) 嘉陽妙子：南北大東島見取図抄，具志川市史だより，第12号，pp.49～58，1997.3
5) 沖縄県教育庁文化課編：沖縄県文化財調査報告書 第144集 沖縄県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書，沖縄県教育委員会，2004.3
6) 九州大学大学院芸術工学院西山研究室編：国立民族学博物館共同研究会「ヘリテージ（遺産）の所有と利用に関する観光文明学的研究」南大東島観光地域づくりシンポジウム実施報告書，日本交通公社，2007.7
7) 南北大東島の概要は，以下の文献などによる。江崎龍雄編：大東島誌，江崎龍雄，1929.4。比嘉寿助：村制二十周年記念　南大東村誌，南大東村役所，1966.6。南大東村誌編集委員会：南大東村誌（改訂），南大東村役場，1990.1。北大東村誌編集委員会：北大東村誌，北大東村役場，1986.6。
8) 大日本製糖と東洋製糖については，以下の文献などによる。西原雄次郎編：日糖最近廿五年誌，大日本製糖，1934.4。塩谷誠：日糖六十五年史，大日本製糖，1960.12。大日本製糖営業報告書（糖業協会所蔵）。東洋製糖営業報告書（糖業協会所蔵）。
9) 工場建設の様子は，前掲「大東島誌」pp.118～125にも詳しい。
10) 前掲「南大東村誌（改訂）」p.273
11) 辻原，今村，安浪：旧南洋興発株式会社の社宅街について，建築学会九州支部研究報告，第48号・3〔計画系〕，投稿中，2008.3
12) 前掲「大東島誌」p.239
13) 郭中端：台湾糖業社宅群/台湾，花蓮　台湾糖業とその産業都市の発展，近代日本の郊外住宅地，鹿島出版会，pp.519～532，2000.3
14) 小野啓子，安藤徹哉：A STUDY OF URBAN MORPHOLOGY OF JAPANESE COLONIAL TOWNS IN NAN'YO GUNTO：Part 3 Origins of the model Japanese sugar plantation town in Taiwan，日本建築学会計画系論文集，No.612，pp.177～184，2007.2
15) 住民の生活は，前掲「南大東村誌（改訂）」pp.264～277，pp.371～374に詳しい。
16) 前掲「大東島誌」pp.250～252
17) 南大東島まるごと館所蔵のアルバムより。
18) 山成不二麿：北大東島に於ける燐酸礬土鑛床，東北帝國大學理學部地質學古生物學教室研究邦文報告，Vol.15，pp.1～65，1935.8
19) 阿曾八和太：燐鉱事情（東洋及南洋方面），東洋製糖東京出張所，1925.11
20) 住民の生活は，前掲「大東島誌」pp.319～321，「北大東村誌」pp.198～205，pp.248～270に詳しい。
21) 岡長平：加藤忍九郎伝，三石文化クラブ，1958.7

*1：熊本県立大学環境共生学部　准教授・博士（工学）　Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
*2：アトリエ イマージュ　Atelier Image
*3：熊本県立大学環境共生学部　助手・修士（環境共生学）　Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. ESS